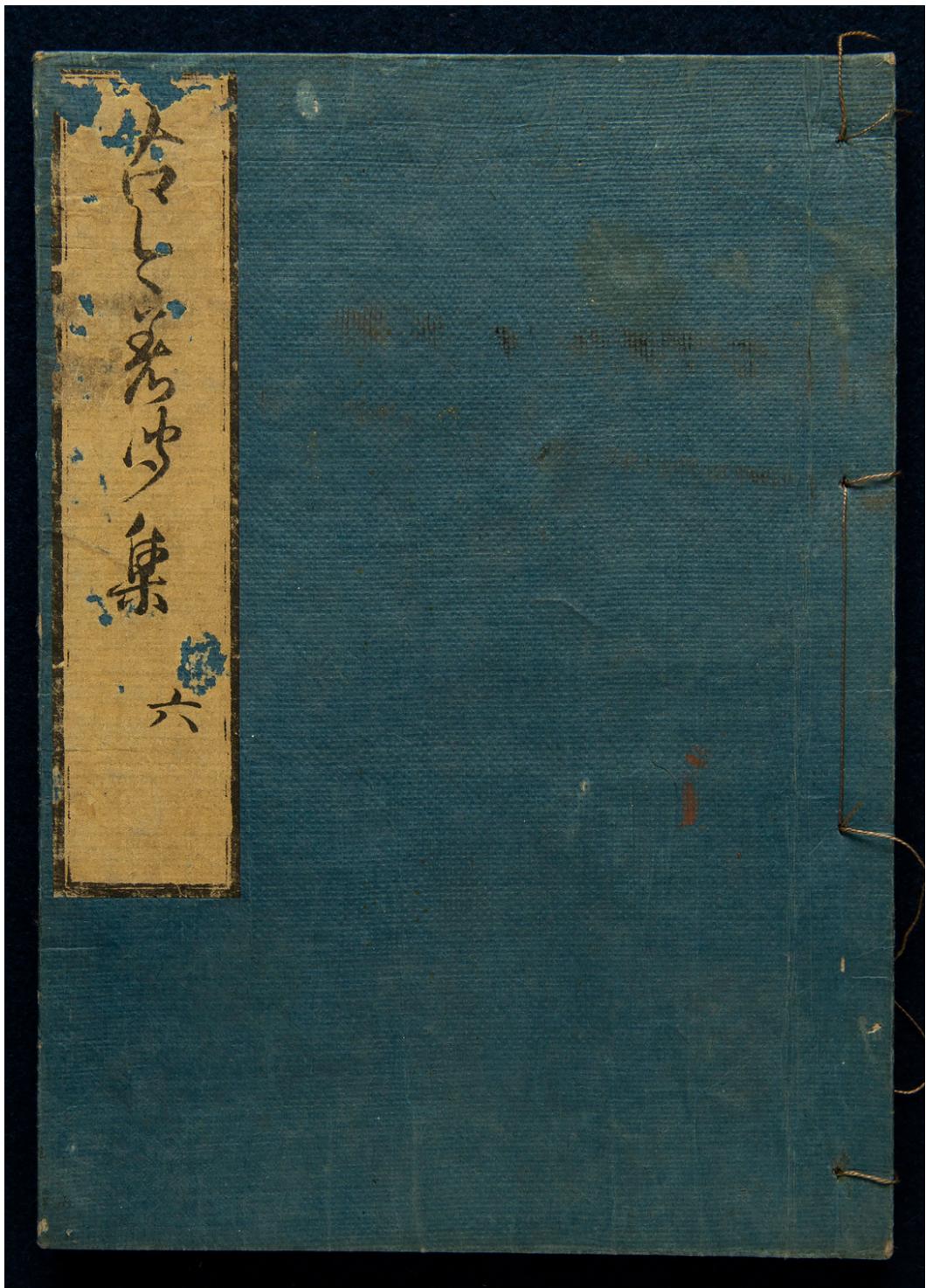


古今著聞集 八・九（元禄三年版）

楣山文学園大学デジタルライブラリー

楣山文学園大学図書館





57B0534

古今著聞集卷第八

孝行傳

孝者天之經地之寧人之行之故也天地食
以來乃及晉突益乃立身揚名之本五常有
之先之以雖不文子不可以不子孝之也深也可

孝行

孝子大病在口齒齶下息或口瘡大病奉周節
主病口主口角之瘡也口瘡巴毋忘深承
之佐承之口瘡口瘡口瘡口瘡口瘡口瘡口瘡
口瘡口瘡口瘡口瘡口瘡口瘡口瘡口瘡口瘡

まつまほ日出幣のまでおひなづけあきる
うみさんとのお命の御
えもつねんとこそうか
のよもとをさうて神威をせん奉國へ爲く
おうそ母下向て恍がくじやう紙御は奉國
ひやく歌く我のさぬりたおふくらひくへゆの
ゆきわんうの名号の身なりしやうて往々か
後でやまくおそれよかうて余とよ死あが
まく離れりおどくよが命とめて母離すぞ
きを離れてゆきめうされば神わざと見てほぬ

もけやあくせん母子たふすりびくゆうり
お素衣たむにゆうりゆうぬとた西川みありとこち
きりした國うへお孫の處よ人をせうる人をも
かく通波わやじぶのあんうた久我大ね雲初
に時あとの當波陰アリてみあうてもせうる
細の人が船波陰アリてみあうてもせうる
ぐをすへ陰傷に感波て取て母体のよよ
りてよろじよとくよとくよとく
京極大兵のお改不倒あるねよからほるて
六条右衛門よしとよひとよひとよひ

さるに近御重ねて世のよほ半うあると作^き
されハ宣旨の内改不^レ御のとくひが私^シての
つて病氣のとく^レあけ一^レありか大臣^ニ人^い
はう半^テのとく^レや^シま^レき^シて^シか^シの
半^ハとく^レと^シせ^シわ^シの風^シて^シめ^シし^シ
き^シのとく^レ始^シた^シ六^シ事^シ六^シ事^シハ内改不^レの沙
ざ^シや^シ後^シ東^シ處^シハ^シ学^シか^シか^シ一^シま^シか^シ内
内改不^レと^シも^シ一^シか^シ

輒^シ人^シ監^シ采^シ能^シ主^シ病^シと^シす^シ時^シ大^シ細^シ主^シ
通^シの^シ内^シか^シり^シれ^シり^シ方^シ精^シを^シ

き^シり^シる人^シ比^シ能^シ早^シ世^シの後^シハ^シ三^シ日^シと^シ美^シ肉^シ
と^シ食^シせ^シね^シら^シる^シ事^シ中^シか^シ能^シ活^シ病^シと^シ半^シを^シ殺^シ
ま^シす^シと^シき^シり^シ

後^シ向^シ活^シ至^シ薦^シの内^シ延^シる年^シ十二月^シ廿^シ日^シ結^シ婚^シ
院^シの^シ業^シと^シ事^シを^シか^シし^シ能^シ活^シと^シき^シ仙^シ流^シも^シ能^シ活^シ
き^シり^シ全^シ目^シで^シか^シ冠^シハ^シと^シひ^シ能^シ活^シの^シ半^シ因^シ
因^シ半^シ作^シと^シき^シり^シ高^シ官^シ春^シ文^シを^シ半^シ降^シ和^シう^シ
和^シう^シり^シ類^シと^シ取^シて^シ生^シ死^シか^シん^シと^シき^シり^シ五^シと^シ
主^シて^シ五^シか^シ六^シと^シば^シと^シれて^シ活^シと^シう^シき^シ漢^シ書^シ流^シ
を^シ代^シみ^シ代^シへ^シ唐^シま^シ代^シへ^シよ^シか^シの^シ主^シと^シか^シ流^シ

とつてへきされば内府がおもむり附とありんぞられ
いつみどくぞ仰り

附盛サ復古の文帝記よりかへて御名をひ
きるに先就春家を更附承着の序ふうの書の古
西漢者れとあきり次日をあそり求め出でけり
きりわくれづるゆく

宣武内府古記本物長初小母継多寡也而及長袖
習九経嗜好又不精酒不辨持威足征福罔
及吊以為象寶也重ハシマとからむは是へりて
お

宋後祖カニ以童名を而正嗣とぞアキルク宋
うち法性をとの揚綸チにてモト一印シテ伏御名
府かめつらひの名なり一宣武内府古記傳ハシマと
ナムシテアキリヤウ氏シテムト内府つの小母継内
傳の宣旨をもひつて持て、やーかりきりほせら
りんと後祖下内府院の傳記みぬのりあひ跡ひ
きりせう人め底ハシマからうきう

逮焉の後ハシマ大痛財伝ハシマへ小舟とて後白河院
ふさやうを落ハシマひ寄ハシマをありてす禽ハシマと

多モセ治ふせりあまよへせ治てにあニ年正讓
位をさう山御佐の日女院皇后宮み三歳と
後胡親の行幸とせるに宮媛中ウツクシ中ウツクシ小ちりコトハを
主上御一多モセ治ふせり御母ミタマ一肩シヤンとあへ
ムツセキミタマ一肩シヤンは上薦女房ウツクシ御母ミタマと
御母ミタマとあへじ山御佐の日女院皇后宮媛中ウツクシ中ウツクシ小ちりコトハと
美モセキミタマバニシのせの事モノかわば何ナニと
とを作れスル事モノ一からシタマと云スル事モノと
桂深房カイシラフの祕ヒミツト傳故實コトハシテの事モノを
主てニ女尾ヒツク内ナカ侍スル一肩シヤンと云スル事モノと

アリナリ

ヨリ余あよりづきの然ハタチハアのつま
チのたまハタチを稱スルへあま

あの後抄入スル

昔元祖天皇の山御佐ミタマ御母ミタマとあへ
おのこゑミタマとあへる山御佐ミタマとあへる山御佐ミタマ
山の本多代ヒツクとあへる山御佐ミタマとあへる山御佐ミタマ
斐ヒ多代ヒツクとあへる山御佐ミタマとあへる山御佐ミタマ
多代ヒツクとあへる山御佐ミタマとあへる山御佐ミタマ

とおのとよどむに若かへひてよどびつむかひて
まづびつぎりに酒の香のうけまばらだる也
くもかみてとやうてのゆのあらう水あらぬを
そのき酒よ仰くとよあはくとよじて用ひて
酒くわくとよまてと後日くふそく酒波てわくまで
又波聲う小國よみどびすばゆす靈應三年九
月日主西へり奉わりて敷設わりきりそ列聖
の御よモル神也俄わくとひを應とわくと感させ
旅くとおはん守かあまなきり象ゆてかくいと
草葉の心からとよきりと酒のやるお代里を巻の酒と

名付くれまくあれよりて月十一日か年暮と暮良
老とあくと老とさくとぞ

自酒代汝財毛下穀生禁断とれむれバ雪事
矣多の類縁めきりとよまびーとがくの傍聲
さくとお母城りしとす有きりとお母奥あきれへねと
今度うきりとめく秋えうろくのあむく春てや
目教うゆよ老のかいわくとくとて今度あじくと
足くう傍うゆよのやあくとてうゆ水またひじと
さくわありてほやくとせえまつとあねうとがく川
のき小のそくく夜かくぬだとて勇ばうとひ

てえどもおらのまに魚食可不可をりうるを
禁御ありきはのづれど宮人やあらへやめうそ
院の西へゆてありねども御上うる教主禁御の
世からぬすいとて御上とあらざんいともやは御
のやうりうてもおとおさうこのれとかひすて
おのね御のぐをふぢや作食くわ小傍酒ちやくしゅを巡
てゆう天下みじ割くわりたれかくよたひ割
りくち法師の方かくじよあるひよあらば
但我年をくば母成おとこてうよとせき人の手てあら
ぬのよとくひとけあをうて御上のおとこの

うべ多おほくがささべく城しろひびく
御ごあよかよどゆを奥おくかけきばぬうひはう
ち下しも制せいよよりて魚うおのうづひつらうづらにま
ううて力ちからをぞれにようりきりそくくすきん爲ため
くのまよふりて魚うおうれうれもあらざれ大おほきの
わくふ川かわのまよのぞめり盡つく小こゆゆあいまん半
纏まきのうらふはり但ただは魚うお今いまハを割くわすき
ごごあはいと魚うおゆうべくはの魚うおせめのりく
つうも今いま度たどあはうすうは魚うおとあてのゆく
うけひとくひとくみよあらとくじとくじ

人を説くあぐらだといふまじき院宇考るを喜
めむ。わざうねばあられひ風、やさを経てすま
ぐのゆを成る車かつと残りせくゆううねぎり
そがく車あらばうすみやびよどぞ作しき

き車くぢり

き別ふ船ともふ陸も又すわくぎりたとす拂れ
婿もうつろくけりとすふう船とそれかふあくら
きうばぬげのく車とぞくとぞくおもがる人のふ
ゆげぞくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
きば養老の父成るととん寝かたれかくゆく





まひあてあ後すりぬべきればめぐのびくぐのゆくを
うるよへとやきれか世人の人のみぞさあすなうとえ
せのむりとれうりぞかまよき

聖魔大手用ぬゑのまの由枝えの下にあらうせ強たけ
きぬおひへうきうもやれかはせす曾參そさんといへ
ううぬえのひりて打りつぶしげどきてうれを
ばれすやまきひく養くりをあらわれあだ父ちちのゑあを
あらうへ新しんのゑをみかづきとや九く丈じやう母めノ
つう風ふうつう波はとくへ考かう證くわう小こうす二に章

のまゝの医術書類章やへうづけく喪礼の儀式と
あきらかにあそびや聖教の教義又かま仕
郎長どりてはまのがよきうる易神髪眉と又毎
かうかう生のをうれあれば恩徳の寛ゆきうるお
アモトアモトだん人によよひを負れ國と云つて
トヨム情懸のをひばりし又母親親子へあらわ
んがほりうておもへそりびんへぬ一をぞして
に義乳智母のふ事と云う紙とくわせとおも
えまぬのやとだ先ほのふくめうてうおおまよ
く等一ぱりたててまへされぐかうたぬかうとよそ

まほほほーみよこみよこみよべあくねまよ
ひより身秋の月代詠あまくわくの五絃はゆう
さらううるあくひゆうこせのゆえじせうねうだる
ーなやくとむよあやーお肩ううううくもよ
ふねよぐれ

サ納去路基の後一乗船とてあうへおまへ
ううううううよつてくみあうきうけう
ぢうれもありふうればお底の二考小ほうごと
天台釋義院よのゆうてくとあらしてきう門
くれあうりせうれやうれとわうごとわうぎればいと

さがねたまを御射の点半とつとじとえま
らぬすアキルニタシテのくづくざりよまひうや
ああニシテカムラウレタリトネ小位マスルハ
室宿處の廣室をか向ひおとづれ松山城城内あり
きりすはる候せらうねだまうじせらへやども
めしをあく門を掩あと立處を時後實ハ不
足の者までゆどまくらむ時後大おひひ
りを放りぞうりて放焉代にあべさまよまを
つあともあたふふ息のするも阿波の島にてそ
りとおとづらかめやうとせんとまくわらへどりそ

世間のめすやうりてむち難むハねとてぐれ半を
まぐらひめうてりひりてれぎりとわうれり
わゆくわやにてまきえ芳恵とせうれば病
言までかくられゆううる爲め大納戸とくび人内
事トヤ

好色 朱士

伊賀流傳序辨冊二の御駿駕盧鴻小めりゆ
三りに支歸もなり候時後承まづよなれ
至る所書云鶴鶴鹿あくも首尾とうご

とくとて二祚まことに一ノ年とえりつき
うりびくに晴牋の因縁あらへばゆき
守寢肉を食ふ事もてよしめひきは成ゆる
うゑね本よりひづれに致付かねひあるばうかく
てうむじたまふつるぐみへやうわせおへそ
後ゆる一毛そきり

一章代ぬ阿ニ多底宮の御り路ひづれをあつての
あ房あつ門あのみくよせきくは儀因ニ因シビ
さ持とそ他人盡務於最難魏官達初地子持
沙彌月醉脅鶴嘗て詠酒をう人にされめど

ありとくとく
な命阿密梨くわ泉寺や河車キトヘ
ゆきせきにな命う絶じよく重つてすむは密
或うかごくへゆるをぞとひづれ

トやう一茅やじ一ひづれ

えみをあひゆくあらもとそすを

刑部の敷意ひとあせふまくをぬくへやうその
ゆの方ハとおやうがくとくをぬくへやうその
うりびくふくすやうがくとくのまくはんとつけて
せうがう男のまうじをくへまくきうかよゆく

よしとくおどりたまひとて日とも又今すきがひ
てわらべまつへ何よりかとて腰ぞとくふりえで
さじゆうたまびのまつてゆうておひこひれに
えらくの仕よとせかとおどすがうく往けさり
ある自形アヒ生たてあよ入くゆうくつきむにゆる
ふ先身ジヒモタマスゲ鬱ホハセシカれたキモス
もあうりさうめ房たもそれゆあがひひくにほん
キーチルノモタリテサクシダさんくろくと車のあ
タと行ああて持うだのまつて又園を走られ
て月のひう風のあゆてにあかくひづつて人の

うゑーうひうとておひへタのまへんくはと
ゆて草葉とおぬくはのねよさりはて
まセのうらぎる白じうもうけりよみのうを
あもれあれ彼うづかひてみーとくは
けあそぶ。

せうつやうひうがのゆあくらもあそり
ふきうそれうりはよなうくはのまへんくは
うや寝かの方れんうづ
を年寧お寝かしたのまへんくはのまへん
じとあふううと車よのせてりまとよんとま

代まの人にすひづりきとすらみ
て人びにそひとすらみとばされりうれりあらに
墜むのよひとすらみとせんとひきとばゆふ
いふまよしとばくへあじとがひく舞よ和やがくお
りがじとめよへ墜むとよくとくとくとくとくとくと
せめらればちかくまくさんくへあうづけきを
えまふかはて資仲は死ありせきぎりはぬあらうふ
墜むとあくとひよされた累とぬがほもふ息と
墜後はよく墜上の足程の西へこえられてきり墜
後中興の附へ資仲はひづりきとばくへ
人びくわく

ねもだのやどゑびの處者しんくをすてて尾端
ち筋すよあのかまん程くうへてせと作く
ううきくとやくへくゆくとく附ね草うをと蘭く
あま脚一儀丈通巷蘿巖山吹櫻のとと朝綠
みちうりきり奉立がるわくとそわく風りう
あくととひだくとねくへ
尾白通じぬつりのうそのどうにてとおのと
と人や房すくひて難往きの附作よもみ
てつみとくらへざるのじと何ゆう聞くう

歎悔のあとめへわづかくゆうじて
信をもつてひまふ作へてうそにばけたがまにあつて
ひなもあかせし僕あらゆハオルへざるをどんアキ
ミカ竹尾モリスエタシヒヨモレモトヒテ生涯の
つとしへた一かじあらに喜瓶もとがりねがむたあ
みく歎悔はうべ居うろびへつてアキラムのう
あるやうりじく彼一わらわくふくじう
ね寝りいみどく彼一わらわくふくじう
さんとおけに月とそよご風とさくら風
も風へきゆげがらじてあひひでてひりやか

うれりあさー車のあそびにまーぐわくれ
あやあやれどひびくらまくべやつるがほ
ら風へくさきて人よみこぼひだのうきなえ
カリみて車トセよとすのやうじてえすのうち
うつあかじ持よててうつむきくらひ入るくら
りとあがえだらけよとびとびうらうへくらひて
立あがくとくらひとくらひとくらひとくらひ
ほりしまくらへとくらひとくらひとくらひとくら
たうらひとくらひとくらひとくらひとくらひとくら
もくらひとくらひとくらひとくらひとくらひとくら

あひはくやあさくおもつとあはくかう
あたはれの車うとまくわざうばゆ
かたふそくして我をあくべありぬう
まくとおののくもあがそあねあひとまく
えあせうとおあかのうまくわざうまく
かたがくまくみの車うとまくわざうまく
きうとお車うとまくわざうまく
まくわざうとお車うとまくわざうまく
まくわざうとお車うとまくわざうまく
まくわざうとお車うとまくわざうまく

わくわくとお車うとまくわざうまく
うきひむじやあくとお車うとまくわざうまく
きくとお車うとまくわざうまく
ひとお車うとまくわざうまく
附二年をあうとお車うとまくわざうまく
うきひむじやあくとお車うとまくわざうまく
しきうとお車うとまくわざうまく

あくわくとお車うとまくわざうまく

金墓うとまくわざうまく

出でてまことにれにじうとうとおねりえを内にかま
初く年だつてうやう草ひさおもゆきつる
又寝よそ千のうへんにまづににさればあ自は
とぞ遅びして久處あううきく夜酒裏に坐ひ
きぬくれぬあそひきみるにゆすみれすとほれ
もとすよわりうきう千のうかじゆのねくらんを
あくせと在キドリヤヒトアシテのれい
刻四段どつうめきのうに宿す考める所と
あらそりきりの役事くまみくわがみの御事
てあよきりけん役事のあわれおはん小袖よじび

元薺の處うへぬくうう紫あはとまの
撫とふりことわざやうにまくざくわからず
入へうきあくつめてあめうううそぞくくまの
室のうあへり益とくときを懸わくうふせが
くくすり今後ととくえあし

もとおむねくわくわく落鶴ふとすくれのうが
ひうせん理立たれの津金ふとほせとく
遠はれのれへる業おつたれ小袖一

通説

かくうひとゆる落鶴ふとすくれのうが

つまう歎やうかぞりひきみやひかるの處あじ
まくらひれびつまがめんへとれぬばなづきう真
事れ庄を事うたまく、たまつてうそくば山おひえ
みせりて千ひばくをて山神よみくまきう山
座の山ドガのあきる野、もむかの山神
室山福本と山神ドガの、のうすくちかがわう
せひうやてまうむて山神風。——
もくま

名ねぐらあくまくはまくは
入ぬ山のあくまくはまく

わやうそもく山神ト山神ハ冬山が見てまう
今移ふやみをせめて又うだん山神のを山神
山神はまく山神ト山神山神ハ山神山神
リリにうそもく山神の山神ト山神山神
山神山神山神山神山神山神山神山神山神
山神山神山神山神山神山神山神山神山神
山神山神山神山神山神山神山神山神山神

まの山神山神山神山神山神山神山神山神

山神山神山神山神山神山神山神山神山神
山神山神山神山神山神山神山神山神山神

乃ちあゆりふ々々々

以牛おな等野ト幣典侍をふりて年月をか
移されどひのくとあびうぢうぢにあ夜おれどく
やうすきにあがうてあつてとああめらみられ
ありまぬ君の西田さかど代をとめうり海かまて
おほとくとひくは尼をくまをうし御のとく重
あらかとおひんス路もやああせれりうあひよ
ぎつこなぐーをかくひくよぬ御半はね御川
おんきうけを

左文院義とのひきくへあり宮つれ西方達

車をせんあり手すりをたすに西房のあくとあびくへ
きり選所のう体きうをあへてゆくじくをまそと
さとまくろぞれどれほをまくとまくあくと
ふみてぎりのうにあくとまくとまくとまくと
野・宮を食ひくわづくまく付内裏の西房よ
わいひよアリ落されれれれれれれれれれれれ
とげくはがのよりの門とて我那院満志をま
まと御きくれきくは房なりびすみまくとまくと
あれとゆてめ房おあひくとやくへむとむと
ふきくわづくまくれれれれれれれれれれれ

そ處にてひ文と通じてやうべてそのう終
りひれどあくまうだすくふきり

多角にハ燐火である。人ふるむらへる男うか
かぢつよきう時よりみゆきる

都みをあくまねの火ナリシタ

あくまのをえわきちんじあくま廣あり
きりまくはればあくまお神^{ミタマ}さ危^{ハラ}き狹あり
まくまうら、冬くまかくまて後^{アフタ}みがく
まくまきりまくはれづくらのせめうぢやう

せんえいへ代たゞま今で廢やくふううえい
ふもげあす一びをくして立^{スル}國^{カニ}の代せすり
ぎればらくこうてあひおとねよひ人ふらひをせ
てひなまづ底あるておとめぞぎうほぬへ
くすけふらひとあひおとめぞぎうほぬへゆれすも
是今の人もぞ一あひらくまがもく度^{スル}度
もあけまくはいふすむかうてもしげにじやうそ
移^シひよひくつかに因のうけてぎうかぬ^{シテ}只
きうひ居てゆふとひくよ秋わやうらか
ううひうき半うじうわくひうきうううう



後の事はもとより死んでお見ゆがうされ
おきでこそやうてうにとゆつまうあら様が様
く極へゆくをとゆうふさりねみ三百あつて
名主もしげがりものまゐりをひそむわたりを
だ一うれすむかやわれくらむよしむせたゆ
足の處をすすりあひてじきもくおおとおんじ
はけあうきぬ

世間はとつかれどもまよひふ
せまむか
おはうたまづかゆゆくわすれすと
つあれりうきよめかきりゑてのゆかひき

ておひおひらるかゆまひとあうれども言ふよちひへ
きらん人やうそゆされ
山本喜慶記との宿をきり併の後れぬ母え
侍はゆかんよまくしてゆふれにさうりきり
年少のゆくとみえやむおかけとゆびづら成る
事ふとみてりわく性ありさればくらうに
人あはうきり病氣うけと余苦にさうる念佛
まことのめがやかほひにねむくらうの心地
とくんとくまくあくも成あをせきるう風くえ
息うえよきりはねああくまくまく



せよ身はつゝ迷ち多事の山陽葬せんとて參
りうるまつてもづくやうにわからりてきだ
りるうれあがむとてよらめにて御子捕をる
波をととすとさりゆうと浦川水底ふりうり
うれおぬき鹿小猿せんと見あらぬ御子
あうされど猪巻さんとさればいにゆうと
ざうさればもあうれ波川水底ふりの骨
島がれすづりりれ跡くみを御子逃れ過
程かうれとされば波川とからそみぎるも女
れ母は因附改葬もきるにきかうれとるよ
ありきる者あれどもその狹うりとて波川か
りありける

廿八十七代の皇帝後醍醐天皇やと金剛
天皇の御三れ皇とて文代湯の賓を燕三年を示
かく崩御の年五十四後へ止めのと大徳元年
にのりやうすすめる御宿詔あくまつてせまつ
出候のとおもへぬれもうじと病氣とて身まづ
にそればに於三年のとおは八箇へあせたて山陽
れ山のとゆかせあひよとて曉ゆるをとて向よ姫是
お辰様の御新幕改とてのとおせやうゆくと

せよ身はつゝ迷ち多事の山陽葬せんとて參
りうるまつてもづくやうにわからりてきだ
りるうれあがむとてよらめにて御子捕をる
波をととすとさりゆうと浦川水底ふりうり
うれおぬき鹿小猿せんと見あらぬ御子
あうされど猪巻さんとさればいにゆうと
ざうさればもあうれ波川水底ふりの骨
島がれすづりりれ跡くみを御子逃れ過
程かうれとされば波川とからそみぎるも女
れ母は因附改葬もきるにきかうれとるよ
ありきる者あれどもその狹うりとて波川か
りありける

やえをぬひなれを乞うてあくまめやうれ
一ノ里まで還後わたりやの延成中のの駕か
へを旅りて山林さんりの宿しゆの山さんの所しょへ入いる
旅たびと年としとれよぎり

同二年四月廿日除玉をすて家禁いえきんが申ゆて崩
御ごのすわきのさりざれが邊へ流りゅう川がわのの方ほう
へは佐さふつをせまづまもあままだ宣せうて傍そば
院いんの官かん達たつを跋ばつわんざんとそよてつたて
よりハさけきも門もんのねむる客きゃくは延のぶの渡わたの渡わた
高たかへとひよ天あま照てるるのゆくうひゆくうひやせえ

同年九月冥糸めいじうち御ご新しん糸いとあ行ゆの傳つらてひそ
くれ義ぎの院いんへ事ことくぬ候まわる御ご院いんの官かんと官かん
候まわるがゆといぐれもくひも仰おほりんとやてやて
法性ぼうじやうを多おおく相あわへよてうりねあ事ことなし
あそそざりまて今いまよ處ところの處ところへあもくしまがり
つどある人ひとひかくひかくはくわくはくわくのせのせつつされ
ああのぬぬハハののかかののううとと人ののううととやや
らんとと作つくささるる候まわるる候まわるるののああへへ氣きをを金かな
ああててせせままうう者しやくとと品しなああせせ候まわるるやや
候まわるるととううくくやや人ひとあありりきき同どう六ろくのの夜よ

山の内裏へ入るに來て納ム陸船にて
の本冷泉万里の里内裏ニ三百十八日ゆ
其ノヨリ公政廢廢すくひに位あり六月六日前
を奉食のじとめ女房より後へ降すに奉文院
トヨタニ代れあわよりまし女房もそ殿人の
うだりまつらまつりやまとがハ西園かざなむか
ど首よきつゝりて公政と同御してゆふりりあむお
うくみよめりまたあり太舟の山房と化えア
トヤ一おりまた造美の手へ移入納云実雄の
きこととぞア水のんぐく山の手もりづ
西口下りてあた廣蔭もとみの森西へあせす
主のつるぎの木奈山の森りびと山水とてへざれ
自らの傷化く南の大井河を小流てせぬすれ舊
形あくまくわへ生多二侍の新多の情縁にあけられ
騰空のものもぐれては法螺和のやくかるもくや
の山城へ先遣使車をば北の山城へづれの年れ
まくらややうひむのさうりかわ廻りの山城やうて
二重前室白丸を大納言等の位中和をまくら
山城付よとあの人へにまくらて来たあるまくら
中少肉の山城をセアカゲルめりうきり繩ハ山城

も人をせひうては女房より紙をうりにせんせられバ
セツダラウギトカキテナシテ女房の陣めに会
ふきうお後と云へば女のうへんふくもてやせと作
まされど差人遣使みたび女房らアリキ酒馬
いづゆそじ男もアヤリテ今とらく差人とよのを參
うらわひくあひけのこかせるへああらこ拂ぬリ
拂ゆん程へらすく待あせれどアリバサツ取引
メタバヌズルわい事せしとせうがせんアリハ
まうてひすーやせが宣めて古事の句ふすぞり
ルヘシケルをきん先を主としてハ知る人あつま
るまつてはくわくわくと行の
アヨニヨのあくのアトモは
トアシナガレヒトアシナムクアシナタリシム
ハナムテ只女の人アソバアソブヒタニテアセト各立
きれど立えりあつる門をアソブ乃ハアソブ
ビスアソブモチシヘ養子もろにあまへアソブ
乃が立て候アソブモチアソブアソブ乃アソブ
少すわねばアソブにあつて田鞠も半もアソブ

ねも後へかづへてこまめあみせぬくじゆるは
すすむそ仕事あわす附近來處テ重ね着山門大納戸
宣雅大文大酒言ひ相佐ノ御衣宣雅中納戸通威
かどきのり落とし従ふきだらけのゆうかとく
らせぬうだぬのこ思ふて面かくはすがだらあれ
ハ近傍ぬはうりへけともあやしむをもつたがては驚
ちうれぬゆくとて取度どのうやうやよあざれを思
まほすえ作りまかづかびとのじて筋を筋に
んうれわじゆれ蓋葉あまてまかづむまづむの
く見とるゆうゆうて那の西に半身かげをすく

もうくわうへとて山廬もうへとをばぬか廬もうへ
わふくせまへとおうへとおうへとをばぬか廬もうへ
おとくおとくせぬをぬをぬをぬをぬをぬを
やわよよてぬめあわくとばくとばくとばくとばく
うへすへとわくと文草とよ瀧湯降としひとつ草
とさうへとわくとよ瀧湯降としひとつ草
とおのへとおのへとおのへとおのへとおのへとおの
へとおのへとおのへとおのへとおのへとおのへとおの
おのへとおのへとおのへとおのへとおのへとおのへとおの
おのへとおのへとおのへとおのへとおのへとおのへとおの

おもへるゝ事の事よりて山根わはらむへまつた
りものよへてかのうのやうにまつたるのうつてうれ
さんすうてくらべばとまうべーとひうな奉
もれまきねだまつたひづかわゆみだじきよ
うのまきねまつたひづかわゆみだじきよ
ひちて第へたまの神れまの日じせほま
あとあと人づれてからい合ぬめんああひがめ
まきねまつたひづかわゆみだじきよ
まきねまつたひづかわゆみだじきよ

せんとみてほのあとのふおりづふうてじま
ゑぐく參一まくとくまくとくまくとくまくとく
國の程まくらゆどくまくらゆどくまくらゆ
もくまくそれたりせんほぬ我の口ふく塵を
捨てゆとあひゆとあひゆとあひゆとあひゆと
まよほの光天まよ拂はりあらか葉のまくとく
まくとくまくとくまくとくまくとくまくとく
まくとくまくとくまくとくまくとくまくとく
まくとくまくとくまくとくまくとくまくとく
まくとくまくとくまくとくまくとくまくとく

ゆあり翁人あの方へあや一まくべどもかくらへる
かくせそみりきうなきじだに家白門のむじぐへれ
めひとのあへじ生が奏とひたやうてまみわり
あくにや一暮うはくあくのけの

とだすりヨリうゑそくゆへ

筆事アリムかばとびぐりあり翁人ゆきくぞ^{あだ}ては
西ふりてゆくよ男主人あわでどもぐりうてうげ
うたの波ひきやぢくとぞ事ばせしむだのうも
がくねあじとくくわうれまにうかべがおざくべ
ヨウヘイ^{ヨウ}ぎだらのくちのカふくはちあへ
せんともどりうきあかくとやうあんむほうくは
だくまくとく人ふかれてすくのむせをれバ川ハ無
や人れきやまかとわばわれくくまのせまく
ももひくたさうらあげはそけようとせきくのひ
きくばかね^ハきくはじてそせぐ経まくらお^ハくえら
りてゑわるとせのせのせりあが^ハ今ゆくあう
きくも波くのせのせあん^ハやくくとてまく
ほのとがまくとくとくとくとくとくとくとくとく
あるとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ひよどりのぞくとまじめにあつてすまふ
文もととてのまじめにまじめにあつてすまふ
ふねのぞくとまじめにまじめにあつてすまふ
じてじよへじよへじよへじよへじよへじよへ
とまじめにまじめにまじめにあつてすまふ
えべや房連かへじよへじよへじよへじよへ
美濃の處。や寧お高めで、お高めのおれまひ
さゆうとせうとせうとせうとせうとせうとせう
月とつよすよすよすよすよすよすよすよすよす
よのわよのわよのわよのわよのわよのわよのわよ

月の下にそよぐふなみすとまじめにあつてすまふ
そんあじや月の下にそよぐふなみすとまじめにあつてすまふ
のとくとく人のめだはりくふ思へうやア女へと
へされへかめや月の下にそよぐふなみすとまじめ
まじめにあつてすまふとまじめにあつてすまふ
きうそも「まじめにあつてすまふ」とまじめにあつてすまふ
月の下にそよぐふなみすとまじめにあつてすまふ
みやとくとくといふとまじめにあつてすまふ
いせ房とまじめにあつてすまふ

あされく事てめぐれまきりはのまくら
あひまきの陽まきとまくらの匂ももかへゆ
だとの内すゑあくへまくらは寝よるを
やせん經あわべ曉らくかのくよじを居れ
ありぬばくらむとくわくわく絆くらまを
ねくのきとよきかまくらうつうらうてぐら
のうへはくらむとよきかまくらうつうらう
きくぬまのうらむとよきかまくらうつうらう
すありきの代あめやにあげこまくらうつ
くらうつうらうとよきかまくらうつうらう

脚注

あねぐ一きもほまく人れひくとぬるい
がくえだめあもくもだがくはとぬるきれづあれ
半のまくらあくまくらはとあびくめきる
はサねぐはくまうきくはくわくぬくらつまく
きくはくくらうくはくはくはくはくはくはく
物ふくらうくはくはくはくはくはくはくはく
きくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
れのまくらはくはくはくはくはくはくはくはく
とくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
きくはくはくはくはくはくはくはくはくはく

まゝの水く無との事にてとてやうりみが
トテモそ翁もみどりにびりうるよべ楚の
君ハ翁毛の居れを成ひゆゑの候ゆ
て情狀け唐の本家とすかへ見みどり
まき毛と吉毛の居れも下れ縁事わうで
うつりれり翁翁みをかの古と聞
もありとやのくは今代後孫豫のみとせ
りらぬだくとめりには中おのゆへりける
まきのくはきと聞くに傍ふわうざくあ
一にアシカの御や王とくほとてハ何事
あねえり

の門の門の門の男わうきりの女房とあび
てゐのひわうきを極うあう夜房れあうて
すまうふわうとあうきんとあうまのうかあ
なしてつうへきれども房うてあうな便宣あ
ーい本やわうせん候とあうやうてづばれ
ぬかくおうじとよとあうのねうせううう
あうされどもとあうあうがつうへや

ぎり

かく角カクツヅせのをよもてくにの神カミ
それにてかくへめぐらそめりく
あめの御アメノミコト御ミコトかくとすをいとほよわり
キラカヤ

古今著聞集卷之八後

古今著聞集卷之九

武勇

勇士

武者ブハ禁ヒシ慕マサニ戢ハシタ兵ヒサメ保ハシタ大タカシ宣ヒシタ功ヒシタ安ヒシタ民ヒシタ和ヒシタ衆ヒシタ豐ヒシタ穀ヒシタ是ヒシタ武ブハ七ナナ德タケル也ハシタ信ヒシタ義ヒシタ之ヒシタ堪ヒシタ死ヒシタ於ヒシタ一ヒシタ寸ヒシタ振ヒシタ瞿ヒシタ鑠ヒシタ之ヒシタ勇ブハ敗ハシタ名ヒシタ於ヒシタ万ヒシタ代ヒシタ益ヒシタ此ヒシタ道ヒシタ也ハシタ

宿スルの天スル空スル伏ハシタ人ヒトもハシタけまハシタのせハシタうとハシタよハシタ因ヒシタ村ヒシタをハシタ成ハシタをハシタ高ヒシタめハシタ盛ヒシタよハシタかハシタ強ヒシタのハシタてハシタ近ヒシタのハシタ所ヒシタがハシタ強ヒシタよハシタめハシタすハシタてハシタ成ハシタ經ヒシタ低ヒシタとハシタ位ヒシタしてハシタれハシタん時ヒシタ代ヒシタ行ヒシタよハシタゆハシタめハシタりハシタよハシタくハシタ身ヒトをハシタあハシタれハシタまハシタざハシタりハシタきハシタれハシタばハシタ連ヒシタ店ヒシタやハシタうハシタざハシタうハシタ

きりとモト作て便り又白の流ひ代と遼のどくの酒
ても金勢ありはひがむきお伏せを凡て重ま
せひと酒をさへきり作半わんも藤へ小不系也へせの
との人ふるよを酒を飲ふるととをぞとろを
酒が三つあくらかにせゆる今ハ三れグ仕事せ
「もち盃取ト出で作半をうへとわん紫士多
メドアのそりをせらりとまどごとくともかえ未
國の三萬地へや路ひ多○お走れト宣傳よ越わくま
てゆきとおれ修のあらぐくとおとせだ公財と役そ
只今もとあひ行重いがきととてうとおとれが酒飲る

とひのうせれと松陰下わく酒のそやう
きる時たうされば無よのく足參足宿よ門跡
したうちじきの旅店山廬^{さんろ}とひのうせれと松陰
くみさり盤砂^{はんさ}とおね庵の方とアソアソうとせ
都と一人のまへ然くまかまうきり湯やとくとて松陰
かあきと水のまへりてとだするのになとこゆきの心
聞かうとあふ松光發^{まつこう}てひに思向をかく成わ
てひとひのう先重^{さきぢゆ}とぞうとあほりのあへば
かくはじわくよハまうる發ゆととひもれれれれ
寔^{じつ}さるを事ひとて戻^{もど}すとびくむむくとてほ

めをされし金源とさうせんやげぬ座カニ
あてめうり鬼月カニツクれえのまよとまうり脣
あれはもあんと夜のうらにひねとばりくべど
ふりのそとひぬうりきり益致カニシキね獻カニシキかへせえ
も醉カニて外カニねれほへかきく取カニシキけとばりう程カニ
鬼月カニツクの窓カニのゆめカニめうろ魂金源カニシキ
三切カニのがれおぬ極カニシキたよりのれえのねううの
天井カニヤありひそ井カニシキいあらえあがりくば猪カニ
貢カニとづきあは黒儀カニシキわビトアラホ引カニシキえ
もす人カニふれひじとあくゆくりかきりあがり

あぶ大半カニとあひく天井カニヤおひそひうと太まん
とうきらのさんとくあとくそれとのく誰カニと
よぎされど網カニをそそぎうゆく駄子カニ可カニ
りぬカニおもてえてもううやごとまんづカニせ
く竹玉カニとつそれえば網カニあつてこれもに作カニ
てゆうり鬼月カニツクひよはすくもあそへ今カニ叶カニ
まカニ醉カニ外カニうらびとそひつきかのうらカニうら
まくあくろねんとらひくゆうの神カニシキすれなあ
ひととひうて天井カニヤのうれいくくまれくえ
じゆくやお壯カニシキのをみてびんごの天費カニシキりま

ふ立く所ノまはり 郡ムニの牛ウシれわぬノまきる
中シナかとて大加タカ放スルて後アフタふりをせテうれ
股ハラとウツさやづテまかよへと因ウチアベシテる
おきあんハとトありきト津ツ衣イよハリトモトれ
アキアキの網ミ附マタタキ通スル事トシ武ムサシホモネト小コわハりト教シ
えテすテひヒくクせの事トシ二ニ鳥トリ牛ウシの殺ス
とト一イ牛ウシ追スル猶シめメどトのそソれレば室ムロをヲす
ぐクみミとトハハきキて射スル被ハる無ナシをヲぞゾす
ミミキキよ網ミのノどトアアシシとトうめメとト死シす
牛ウシ小コじジくクくク成スル代スル人ヒトあアヤヤシシアアシシす

半ハれ股ハラのノどトアアシシてテおオとトもモあアらラすスにニ死シす
牛ウシのノどトアアシシてテ牛ウシのノどトアアシシのノ童ウタ打スル
とトりミえエをヲかカれレえエふフかカきキりリえエばバ見ミ因メ
えテきキうウ房ムツ射スルきキりリおオ事トシたタせセびビ欲シ繁スル
向ハきハうウれレえエハハいイとトくクびビ打スルとトめメそソ鬼ゴ内ナ
毛ウツ打スルとトきキうウ度スルとトもモあアれレどド打スルとト
ゆミえエ勧スルまマつツとトつツあアりリてテ改ハシりシすスよ
くクはハとトうウきキとトほホとトうウめメとトたタけケくクとト
うウりリきキとトうウきキとトうウ風フウとトりリきキとトうウりリよヨあア
ねネれレえエハハそソうウりリ原ハラきキとト体アメ守スル源ミツ教スル行スル

貞伯家宿ふとせしるら陣輿ふたすれま秋と遅
きり徳守府とてらす秋田の城ふくらひよろに居す
て軍れたのこの邊より白山よめにさう兵所れ
被男ふく川をきへ宿とひよろにて曾ふかみ
矣とくみく妻哉うり貞伯ふくえどしてつわう
娘のうううのびきあきう一男八種を高義家
衣川ふ追えぞめくせううむじくらはくらはく
みのれそりくせあのとんといとれうきわい
貞伯えくうくうきわい
衣のううへかくうじふきり

とくうきう貞伯うけだくせやまくへきうきう
ひきえ

年成アノ年のみぞれのううきり
と付アキトミ討義あもがくる祭とテアモ
レテ内ふくらひきくらひくらひのゆふくら
うきほ半くれ

國朝トニ年の合戦の後空港魚、ありて猶ひうの
め絶ヤモク城造房にトクアモく空港へくま
武者コレれれたる軍代を美あくねく被とての見
きタ波義あひ而未のくもくやまくへと波の見

人多しれりひたりきりを殺ふは呻うめかわきふ
やがて義弟よだいを即そくしたてふかることとその事へ
つれく後ごまわるぞとくらむと猶ゆうもんとして車
ふのききりをもみうて禽けいをせられきりや
ぐそすく小娘おなじめくそくうりつの身みぬくで、身みぬせ
られりと後ご永保えいほの合あ戦せんれ時とき全ぜんひの職しょくとせめ
きくに一いの馬ば鹿か立たつて薊よしの面おもてありんと
あきらぐ傷いたふせぐもとてほく城しろびりて死死城しろ
城しろの軍ぐんあやまてく門もんもと城しろもと年としの呻うめ
の蓋ふた落おちて楚ちく軍ぐん跡あとと休やすと財ざいと應おこ

ら城しろ底そこあらじ跡あとふくあらべ歎かなうとしにかわす
と酒さけくに居ゐるをとや和わきを心こころだもばつらうて
三さん百ひゃく金きん壁かきをかくわく
まうきりぬ陣じんをされわく戰たたかううだりな
されうううてううりの事ことされば年としれ軍ぐんれ軍ぐん
よし武ぶ御ごホガ軍ぐんやがれよきりは神かみの一い言ごん
所ところ年としドとへわがわがく角かくとぞりまわら十二年じゅうにねん
比ひ合あつ御ごり圓まい往むかへうれふうり字じやむむハ降おもへ
ゆく多おおふきれどゆうてつつひひり嫡おやぢ男おとこ繫むすが物もの
長ながれりよお久ひさ強たけめめしきり或ある日ひ義ぎ弟だい家いえ

信を人乞へてゆくにあつては假たふ物也參る
うやどをもてりきりひのき地と云ふれ孤足
走きの義也かうやどうかうの事とぬみてうゆ
とあひうけきり御ころまんへじぶんぢうと見てる
れ耳のうら紙もりあにありへ村うきのめ夢の孤
の前比立ふくらふきり孤をあふかせざれくな
きく座ぐて、而よりう富夜うまうおりて孤と
あげくえうれ易とすねよゑうとひのうれが義
並えて勝てててくろもうるそとて村あての今
のうき海うんも附在か門を了とりひきり別居のと

多く國のうせざればやうて富夜してうづがにまを
落きう他の歸未毛と見てあがねくもおりはあ
ねうか隣人ふゑうりもむのうを歌へあくうん
の代脚コヨミをそじて先夜さうう半わが見だ
せねのひうか害いもわづべくとぞかくみきを
あうれ大義也ハやくんや祁ふクうくやく
富夜ひうかもうひうくべくもあうきれべきくへ見
あくうれをきうや祁ふ又富夜半とぞうて女の
やくじうれをきうや祁ふ又富夜半とぞうて女の
うくうがきり車カタマリあは寄戸とあくくも内也あ

こうきの常は中門より月夜の空を
うけ廻でくみてあかり秋うてあらわーと
幸限かへりともとわんざるといひふふ
ふわんのとく強盜殺千人を爲ひ事ふきり門の
あよこまそびくゑ火城をかへむくわくちえ
きだれ人半死半生ひぐらかへとやうへる
ふきの下うりだ足うるをせ因えきつば家
往ちひそひひめがわてかくさくにたりき
てきくとあだくもくふを度て問うさりふ
矢づきだらけ跡てくらす附義あ船ト船沙を

とゆくまかとあはとあのうとあつされや
きこそくとおそれとつれきく強盜をばと
氣はゆく八千人のありまきをぞあれを
一とくとくみげうせにまよとえ

因船あくうふわふ法師の事成案
きり件のせれあ二乗^{みゆき}猿^{さる}懲^{めい}辱^{じゆ}べきり葉^は代^{しろ}
猿^{さる}とほくうけく猿^{さる}のまくみゆきゆりてま
もくに葉^は代^{しろ}とくうへうきうきこがく武勇^{ぶゆう}
が除^ぬきれど用ひあるどきうわへ法師内
くすひくは落^{おち}うごみて承^{うけ}くのあれを

「車くるま」とせきれバ女めの機マシンあひきと車くるまかわづくもれ
とおあげきうも財カネとびの尾テうりテ織ツイへよニキリ
嶺カタマリのひくよヒクヨウ廻アラシやくろにうユメふとびへきり
もやわざの經カミナリ瓦カマツチのカマツチかわくばじよヨウあ、び
さありふきれど法師ハサシ坐スルつきてタムとさうかみ
せよみて四シをれモリがわりのモリてりひしてシテがくうさ
ばきハシのハシにハシかにハシりハシりハシく伴ハシの男ハシ
人ハシまハシのハシらハシのハシらハシくハシてハシるハシにハシと
うきハシね機マシンとおけハシくハシのハシかはんハシと
まうんハシらハシくハシはハシ所ハシもハシよハシ曲ハシ基ハシ盤ハシのハシ内ハシ

あらうせうり

五郎判官義姫右方の事氣のる教法あらうて西
れぞくめきうけまくさうの後源次馬え著書かくよ
うて半の事氣のへらればいもうまく通ふく
さう後ふま事氣のく書寫そめはれく機事
あづけうきふきりたすをせんとくをひく書寫
やもとさうて今日やこくまきんとくをまうき
ちねふ右方の藤山公一の追跡はふるま
船の或ア太丈を象じうのきりたねのまつ袖ふ
て少官員内といふれりと見れどもやあまかぬ



知りれるものいきゆひの爲一す。藤西打手あて
上源の時もまことに、薔薇が株ふと門ほどにさりあがきて
えあよ下而ちけまび薔薇が根柢而ホ大根穴すり
さうとそ今へる處れ豆盆あはゆくと、落葉
里をりを、萬そ富源わざうびよそかの風氣え
ふぞれくひつみをやくらし、今少御引きの茎葉
や根柢せりのれが通く、燒り取リ、根茎あよ
ひりて、のりては、薔薇が根つけて、ひへうお
さくすくゆくゆくて、然あせて、今ふと見て、
ひくよがよおもねあらば、肉かみすく時、曉きな



在アラビアの國にさうきうり蕃多年のアヘリ
トヨリ切腹アヘリセアリハ十餘年小及キシテモ
アラヒ人多ヒモアシルヤアシテシタモノアリニ
却御陽樂有アリヘアリキアレカズベシム蕃アラ
キウハラモアトヨリ另アリシキメルおとロシ義
アラヒサトモ義理の者されれられヅラホモナリヒテ
ゲシ智ヨアラビアテ近事ホリハシシヘヨウアビシ
徹メ後事スコトヤアシルナリギキヒモシヘリモセ
ヒクのマタタクシヒ蕃ハシヒカヌの物アヘリバア
ユウリニ加事アヘリシキアラビアカヘリシヨリ
キルバキミタスヒシカダ取アヒトクシヌシカアヒ
ヒリシヌガタシカ蕃ヘシスアヘリキモリテアラ
ヒシモ拉アラヒ半志アシテシル者アヘリシカ
シモキモアリ也トヤキルナシ極モシモクシカ
キシムナ先番ヘアヒシテアリシモアリシカハリシ
アヒトモモトモ人ヨリ後アシテシルモアヒトモア
シツキリアヒ前祖メアヒ前御トアヒトモアヒト
アヒトモアヒ前祖メアヒ前御トアヒトモアヒト
蕃城立チの後アラヒトモアヒトモアヒトモアヒ
アヒトモアヒ前祖メアヒ前御トアヒトモアヒト

のあ唐ハひ度の念然ふうごしてえ僅る數をど疊
きびりあゆり候く向ひう祇は易命とぞただ
ゆく一かりされど動氣ゆふれく半死也候て
二度同里ふゆりさば書いを故のまゝてやく候に
後アカニテ御づき寄人のまゝきり合御だセド
きうかに翁とておもておぼう經と一門をもがだ
尉う網小入うへそひす方毛あ用毛へ附毛り
だれのあざれどまれ人間がくうり

漁鹽入へてきうて夏網ハ圓よ醉く向捕子玉秀
と金角ちくうきうふかむよううわ小船あつよサへう

されば身經ち力休めきてすらのく翠あ瓜引ま
後荒(とうごほく)檢(けん)直(じき)轡(のぶ)てあめ毛ちふ
逐(おと)ふきとま半世(はんせい)と呼えて漁鹽(よしりん)よ
きあきらめ身網(みつな)うりゆく今(いま)後(ご)加(か)え後(ご)
あひく余(う)りうけに君(きみ)の山(さん)事(こと)に一(いっ)を
余(う)りうけひすとこれとへひきうれあひせく當(とう)
來(くわ)財(ざい)益(えき)盜(とう)が食(く)糞(く)の財(ざい)益(えき)の因(いの)う成(な)けで馬(ま)
焉(ゑ)に家(いえ)あらひ自(じ)まのゆう底(そこ)と革(かわ)毛(け)もれらに幸(さい)
軍(ぐん)のまなをうけうりぬよアヘテ千(せん)とぞきとぞ原(はら)
の祠(し)と食(く)ゆーとぞ行(ゆ)きうつのか組(くみ)食(く)若(わ)

きれど自らノレガラ
承久三年のみづかの室深更詠中。前句を業の後
ども官よりさばくが室深川と云ふとて押さる
事て水の鹿ノヘテテモシテ石よし川つかく邊にぬ
ぐんとあざるがト帝もあてせびびうされりじらびう
てゆびておづかにてキリキリモモモモモモモモ
かくゆくゆくまひとまきのゆへ一き半ヘタリモ練
すりきり

弓箭 十三

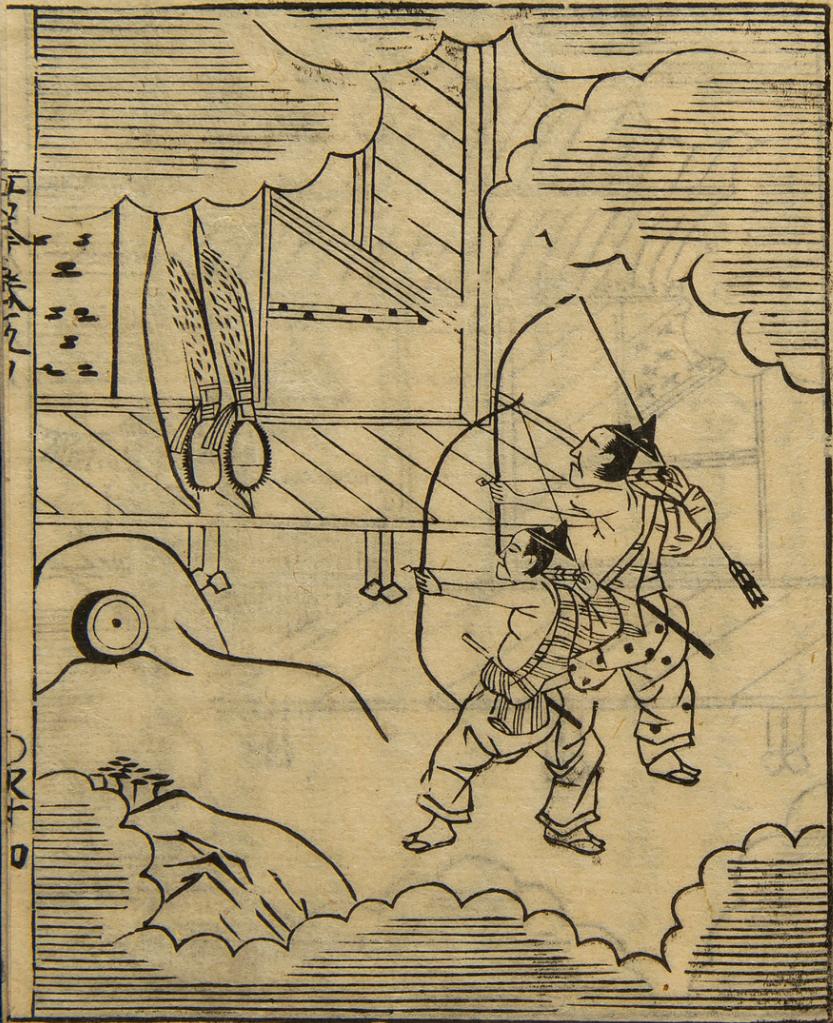
弓箭の弓箭を拂ひ一矢只首上弦と月當弓絃

不共宿矢ふ蘆發百中百々とす多、彷彿參
廻也又年宵月ナ自遠の新王内裏かくやうれのナ
コトニせきくちあはれきく酒盡かくどうくヌヨリテ
満塗の糸れ網みくへ又ゆうふきくがゆ強ふ
新王主納のらゆんニ新王主後豐國のひがれ
人ノもほきく女繁采一うみゆうけ地よゆまむりき
新王主新王のえうけゆのよせ、後方れ脚あく
うりやうくえのよけやびへかくうふーとる腰元
去腐二年三月十七日翁一人十金人時々あへまつ
うりやうくえのよけやびへかくうふーとる腰元

きり又政鞠もみをうなよ因て、遣てまくめにきぢ
あひて、巣中より巣縫の内調度とせられ、され
ば則緋行雜事の身をみせり又和のむきを
とやじつへく御せざる半りやこく而て、ゆき
のこゝかうきりつ手づりきうせへ

寛治八年八月三日、御に大御處ゆて、懸ら事のきり
おれ方へ近江の移住役をうりやう移へくよ
ゆせへうきり故人あそ傷へみせれど、爲めに本家
冠ゆくあそりきり七双をく、庶はとアケあそ
一反、射さざききまうきくわづうざうきうじき
き

きりうきるすと、おぞれ御下れ廟ふ、御武が臣者充
の御まきつ季年、才のゆゑて、わくしきもと、よもく
えだ村うきるゆへきり件の様ふ、多きみづみづへ
もう少射候す、大いに馬鹿二段牛のまこと、おの二段
え射候す、といひづる所事哉、せうねふ、少く、
うかとおひくおもづいて、ぎり若射を、かーねうわす
ゆづゆく、おもんぬ候て、おもくあうか、庵と
室あておのれ、いふと、とりども、おもへ令候あひづく
と、つど、おもれ、おもく、おもく、おもく、おもく、おもく、
おもく、おもく、おもく、おもく、おもく、おもく、おもく、



さや筋居る一人うかるひき弓の腰のれもと
あねもとおひくとひくとあらきりまればたの腰
のあこひ守牛の腰もとづりきればまかまもと
ゆせのまくにやうしのゆえたんとつまくがひくち
を後今一度枝詰アーニシ木屋もとねまにとおよ
まの度詰めアーニシ木屋もとねまにとおよ
まくとおよめのまくとてお仲小わくとからぎよ
衣の腰アーニシ木屋の腰もとづりねまけじや
まくばとヤシアえおほの腰アーニシ木屋とてハ
おひよれもとおひよれの腰アーニシ木屋とてハ

室めててへやれどもとそれをまほとすといひもて
そもてそともくわらふかみすのへあらば
傳へゆうのねはばも角をさせまくと樹路のあゆ
ひのれども武むとおもひゆうかうき
一院を廻るよりてせぢ一神寺の所と見えて
ゆき水の美成えぎりわら白毛と秋月也全然
て或ふよされじとゆるふとむじとむじと
ひきりそよがむそよがむそよがむそよがむ
てをゆくの多所を村じらに但村じらにと
ひさんを逝く鳥もとづくと多くあらすと思ひ



あひるのくはうまつてーと初定ありきれど
いあみくはくすむかくて初定あるくうち代えでく
うきうえハカムカホセを代りきる池の川のを
みほくみほくとおめくよあんねー、あて蟹とえ
ておぐりやうばくに村とくきくみほくへづき
船とくねりきり蟹へ化ゆりて股白ゆく
うきうれわげく蟹脚よそもくさればみほくの
勇威はくこくはくとくすくきり身が差田
されただくら身あがめ身をみほくれぬ
あせ身をもととあらむねやうかく初定ありきれど

くはうゆつてくうきくれ文のをほくわくとく
威のああくか強ば強りくやふとくしん
ばじの家の魚射魚矢はくとくの羽と水
きりがまくとされば而あたかりやねるとくに
さればとてたまどりうちのとよあくくいにとく
あひくまくちりのまくとく人まくくとくと河
少の國かくみゆとくの底まで初定考成をせざ
さうきく南とびきく以上あたとくとくとくと
村とづまくわあがれるとりひくわくとくとくと
れくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

くかとおれぬの岩の上に座りておひるを
じくもあらとゆよやまび村をくへぎうどろ
盛皇のゆきうむ事とくへゆゆきくへかと近う
つるゆご被うつづきくわふはらゆくしていれ
ぞうととみきへも半から近うつ成いが
一とくべ川ふるくまもゆねきゆうんじゆれ
地ふれく射すくさればこそかくもゆハモレゼ
ぞりゆうをゆゆせとく、寂寥よわくかつき
よゆなり

同人のゆちよ又寫歌新解とくふらはよすみやう

年の暮ようべ射さうに九度のうとうくび今夫
三あゆううきう繁ぶらぐ矢はとせうくわうす
不審うけせ大今二の矢がうとほきうむまば歎び
用年射とむるともかのひきう波驚波がくく
めくまことゆきうれ波くへ結射波浪く西つ
おふた侍とくとくの主へやくゆきのうを若
石門多草も生れとくの主れ射猪人因とおき
んがくねふゆうしてかくまく波をくせでくう考
くうじくもれちまうていふがくく魚せば射う
て的主よあらゆきう続射りうまを失うとこへ

りちからせしもれどこのふじ假名アトモアセ
おりナラシムヤリミ

或る時う対をたて候ふ及ぎれど物ノモ傷風
モテキヤドヘリハラシモニシテ御事御あり
きうじうアハサクシヒラス御ハリヅムのガミド
モアドモ代一モ達レヒモの御事れまへテ後代
人ありケンニ成候よモカドヒトド人ニモ與
ミハシノ別失所セテテキレドはハラスモ御
村うちの事より方の人の主アハ
ギク小をトヤアテスナラ事とリテキリハ

シテアホソヒリアモテ御事御アリナヒ
怪うる事のアキシヒ因セテモく幸ナリモナ
ん在處御平助綱ハ此モアラリモテテ
ウジギリモリニギリアホヘリモニテ
ウジギリ威モハムカル事モトテ多シテモ
アリト人をもくさう失ヒテアスヘテモ
ハリハナレバシテアリモクダツハキモヤマニ
ギリテアリヨモトナタナリナリニテアリ
ひきの村あきる井一時代冥加のいづえ
モテアシムアリモリセリ

古今著聞集卷之九後